

## 書評

洪 郁如 (2001)

### 『日本の植民地統治と「新女性」の誕生 近代台湾女性史』

勁草書房

上水流久彦

本書は東京大学に提出された博士論文に若干の修正を加えて出版されたもので、「日本による台湾統治の社会史的意味について、女性の変容を通じて問いなおそうとする試み (1 頁)」である。本書では、植民地時代の台湾に生まれた「新女性」の形成過程と社会的役割の記述を通じて、「新女性」の位相が植民地統治の構造と家族戦略のなかで形作られていく点が示される。そして、その存在が戦後、女性の社会参加の一基盤になっていくとされる。本書の主な資料は新聞等の当時の文献や聞き取りに基づく記述で、構成は下記のとおりである。

はしがき

序章 台湾女性史の再構築

I 「新女性」の形成

第一章 解纏足運動

第二章 植民地女子教育の展開

第三章 「新女性」の誕生

II 「新女性」の位相

第四章 婚姻様式の変容

第五章 運動参加への制限

第六章 新エリート家庭の形成

終章 台湾近代史との対話 — 「新女性」が語るもの—

簡単に内容を紹介すると、第一章では「解纏足 (纏足を解くこと)」が総督

府、台湾の士紳、女性の立場から読み解かれる。総督府にとっては清国人の身体的装飾を解くという点で、士紳にとっては「陋習」にとらわれない結婚対象として、または工場等の労働力として「解纏足」が意義を持った。そして、女性は纏足をしないことに「洗練」を見いだした。第二章では、手芸と国語の教育を中心とした女子学校の設立が植民地統治のコスト面から 1910年代半ばまで抑制され、かつ上流階層が中下流階層との共学に抵抗したと述べられる。そのため女子教育が上流偏重の性格を持ち、階層身分のシンボルとなったという。第三章では、1910年代半ばの抗日武装によって総督府が女子教育の重要性を認識し、日本人化を目的に国語（日本語）教育や中等教育の充実を図り、国語教育を受けた「新女性」が誕生したと述べられる。「新女性」は家庭以外の場での自己の能力への承認と評価を手にし、台湾人社会で地位を得ると同時に、高い教育を受けるなかで「日本」との接触が増え、差別的体験をもし、植民地の秩序を一層痛感するという。

第四章では、1920年代以降、恋愛結婚（本人の意志と夫婦愛に基づく）が親の世代からの反発を受けるなど社会問題化しつつも新知識人の男性の理想とされ、上流階層の結婚では「高女」出身という学歴が重視されたと述べられる。第五章では、女性の地位向上のため女性の組織化が試みられるが、統治者側からの圧力、保守的台湾人の非難のなかで失敗したと述べる。そして、1920年代後半は経済的不平等を意識した階級的視点に基づく婦人解放へと女性問題が転換し、さらには1930年代以降の戦況の逼迫によって総督府が体制的婦人組織の設立に力を入れ、そこに地方の有力者の女性家族が主に動員されたという。第六章では、家庭において「新女性」は優れた家政管理者であり、夫の補佐を行なう外交家であり、家庭教育の担い手であるが、それは嫁として旧世代との対立を生んだとする。また戦時体制のなか植民地統治を支えるよう「新女性」が内助の功という形で動員され、子どもの進学のため「新女性」には有力な日本人婦人との交流が求められた。

終章では、新女性の形成が植民地統治の戦略と台湾の家族戦略のもと規定され、その戦略に利する形でのみ新女性の場合が確保されたとまとめられる。そして、「新女性」にみる学歴価値の確立と家庭外での役割は、その後の台湾人エリート層女性の政治参加、中小企業における「頭家娘」の出現、新中間

層の高等学歴女性の職業志向を胚胎するものであったと結論づけられる。

以上が主な内容だが、本書を評者が手にするきっかけは評者自身の台湾での聞き取り調査にある。その調査では様々な学歴を持つ台湾人から話を聞いた。日本人と働き日本語が上達した者、大学や高女等で教育を受けた者、公学校を卒業したのみ、または公学校も十分に卒業できなかった者などである。その時に改めて認識したことは、「日本」の彼らへの影響及び彼らの日本観に大きな違いがあったことである。著者は本書の対象を「新女性」と明確にしておき、それが評者の問題を考えるうえで手がかりになると感じた。

日台関係を日本から考えるうえで大きな問題は、日本語に堪能な台湾の人々との対話を通じて形成された、彼らの日本観や台湾観のみが前面にでていることである。だが、本書の「終章」末尾や「あとがき」に見るように、日本語人の背後には巨大な台湾語人の世界があり（日本語人、台湾語人については若林正文『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人』朝日新聞社 1997を参照のこと）、彼らの世界を考慮することなしに「植民地」を議論することはできない。本書は台湾語人の世界自体を扱うものではないが、この二つの世界を意識し、階層や学歴の差異を重要なファクターとして分析を行なっている。この点から言えば、本書は「日本語世代」という言葉の安易な使用への戒めとなっている。植民地主義的議論でも目にする「日本語世代」という言葉は、おおむね「日本の統治時代に教育を受けた」、「戦前台湾に住んでいた」、「戦前に日本教育を受けた」人々などの意味で用いられる。だが、そのように括り、議論することは、台湾の人々の植民地経験を単純化してしまう危険性がある。

もう一点、本書の重要な意義を指摘すれば、「新女性」の誕生、有り様が、植民地統治の構造、台湾の家族制度、そして両者の連関のなかで論じられていることである。統治状況を反映した統治側の意向、それに直面する台湾人男性エリートの思惑、資本家や名望家の台湾人男性エリートの意図、日本や欧米、中国大陆との接触のなかで革新を望む人々の論理、旧来の家族制度を良しとする人々の考え、新知識人男性の女性観、それらの中に見いだされる女性像への女性の主体的関与等、諸々の力の複雑な絡み合いのなかで「新女性」が描かれる。この点において本書は構造のみ、主体性のみ、またはある

要素のみを特権化することなく分析することに成功している。

このような意義を持つ本書であるが、やや不満を感じる点もある。著者は「はしがき」で植民地時間に結びつけられ、公共的空間に引き出された存在として「新女性」に注目すると述べるが、他の女性はそうではなかったということであろうか。また、「新女性」の位相は、戦後の台湾社会の家族と両性のあり方に密接に絡んでいると書いてあるが、その点における詳しい説明はない。3章以降に取り上げられる「新女性」は上流階層の高学歴者（高女卒など）であり、当時の台湾人社会で占める割合としては僅かである。その背後に巨大な台湾語人の世界があると考えるとき、「新女性」の他の階層への影響力も見ることがあろう。「新女性」の「高女」へのあこがれの記述は本書にあるが、無教育とされる女性も同じまなざしを「高女」に持っていたのだろうか。本書の問題意識に鑑みるに、同世代の公学校卒もしくは無教育の女性のまなざしがどのようなものであったのかにも目を向ける必要がある。第3章以降、上流階層のなかだけで議論が終始した嫌いがある。

加えて、「新女性」の概念についてももう少し踏み込んで欲しかった。本書ではその概念を「狭義には高等女学校の在學生、卒業生をさしているが、広義には内地留学により高等教育を受けた者や、場合によって小・公学校の出身者もその中に含まれる」、「社会階層の視点からみれば、新女性と呼ばれる人々は、元纏足層でありかつ教育資源を享有できる集団、すなわちエリート層に属する女性たち」（14頁）としている。意味される内容の違いを著者は広義と狭義と書くだけであるが、それだけで終わらせてよいのであろうか。高女卒と公学校卒、公学校卒と小学校卒を同じ「新女性」とするのはどのような時であろうか。対照的に上流階層の高学歴者のみを時に「新女性」とするのはなぜであろうか。著者は使われ方から概念規定をしているが、それならば、誰がどのような時に「新女性」の用語を使っていたのか、「新女性」の持つ意味がどのように変遷したのか、その政治的意図も含めて提示する必要がある。

これらの点はあるものの、台湾を舞台とする近代の女性を考察するうえで本書が果たした役割は、植民地統治者の論理と台湾人支配階層の論理、さらに家族戦略の論理とを結びつけた点で非常に大きい。今後、日本語人の世界

とその裏側にある巨大な台湾語人の世界とを著者がどのように取り結んでいくのか、評者は注目したい。

(ZVC04624@nifty.ne.jp)